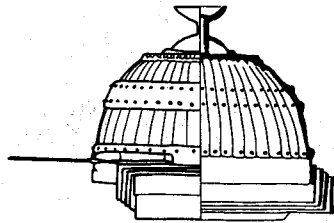


# 紀 要

第 4 号



1990. 12

財団法人 滋賀県文化財保護協会

## 24. 弥生時代～古墳時代の木製農耕具について

### ——滋賀県下の動向——

吉田 秀 則

#### 1. はじめに

近年の発掘調査件数の激増に伴い、沖積地での発掘の機会が増え、かつての低湿地や流路や河川に埋蔵されていた貴重な資料が明らかになってきている。なかでも腐食しやすい木製品の出土例が急増し、その研究も急速に進みつつある。しかし、その用途の明らかなものは農耕具や容器、工具などに限られており、多くが用途不明の加工木として扱われているにすぎないのが現状である。

1964年には県内の大中の湖南遺跡の調査が実施され、弥生時代中期初頭の農耕具が出土し、畿内のこの時期の標識的な資料として扱われるようになり、黒崎直氏・根木修氏をはじめとしてその製作過程や用途について研究が進められてはじめて農耕具の研究が飛躍的に進んだといえる。県内については、兼康保明氏が1983年の埋蔵文化財研究会での発表資料としてまとめられているが、その後、琵琶湖総合開発に伴う発掘調査をはじめとした湖岸沿いや旧内湖での調査が増えたことにより、出土例が急激に増えている。ここではそれらの資料から近江での弥生時代から古墳時代の農耕具の変遷やセット関係について触れ、当時の農耕技術を中心とする社会について考えてみたい。

#### 2. 県内の出土例とその変遷

農耕具は用途と着柄角度により大きくクワとスキに分けられる。つまり、土の反転・耕起・削平・移動に広く用いられ、着柄角度が直角または鋭角をなすものが前者、土の深耕・反転・掘削に適し着柄角度が直線的または鈍角なものが後者である。さらにそれぞれが形態や着柄角度により細分できるが、その分類については『弥生文化の研究5』の「農具」の項で行われている分類を使用するが、ここでは古墳時代のものも含めているので横クワと組合せスキについては若干分類を異にする。横クワは、平面形が丸みのある「丸クワ」と呼ぶものA類、「エブリ」と呼ばれる平面形が幅広の長方形で着柄隆起をもつものB類、平面形が長楕円形のものC類、平面形が細長いもので鋸歯状の刃先を有するものもあるD類に分ける。組合せスキは、「ナスビ形着柄スキ」のうち刃先が二又になるものC類、刃先が又状にならないものD類、現在のスコップの形に似る着柄スキのものE類に分類する。

表1に示すとおり県内の出土例は28遺跡があげられるが、時期的には弥生時代前期～後期前半の資料が不足しており、後期後半から古墳時代初めの資料が中心となっている。これは、弥生土器もこの時期の良好な資料が不足しているのとほぼ呼応するものである。

表1 県内出土の木製農耕具（クワ・スキ類）

	遺跡名	所在地	狭クワ					広クワ					又クワ			横クワ				一本スキ		組合せスキ					出土状況	時期	
			A	B	A	B	C	D	E	F	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	D	E					
1	針江浜	新旭町	○																								溝・土城	弥生前期 新	
2	大中の湖南	安土町	3	1	2		9	9				4				7					2		3			1	溝	弥生中期初頭	
3	志那中	草津市																					1				井戸	弥生中期末	
4	妙楽寺	彦根市	1																		1		1				溝	弥生後期後半	
5	奥松戸	近江町													2										1	落ちこみ	弥生後期後半		
6	西才行	安土町						1																			沼	弥生後期後半～古墳初	
7	服部	守山市								3			1	2	3						2		1	8	2	旧河道	弥生後期後半～古墳初		
8	正伝寺南	新旭町								1											1							弥生終末～古墳初	
9	針江北	新旭町					1																				溝	弥生終末～古墳初	
10	斗西	能登川町										1		1			4							2	1		溝	弥生終末～古墳中	
11	赤野井湾 (1988)	守山市	○																								包含層	弥生後期	
12	// (1985 86)	守山市					1		9	2						○	○	○	○								包含層・足跡	弥生後期～古墳後	
13	草津川改修(北登)	草津市																			1			2	1		旧河道	弥生後期～古墳	
14	松原内湖	彦根市						1	3					1		1							4	2	3	落ちこみ・沼	古墳初頭		
15	針江川北	新旭町							1																		落ちこみ	古墳初頭	
16	吉武城	新旭町							1					1													沼	古墳初頭	
17	宮ノ前	日野町												1														溝	古墳前期
18	金ヶ森西	守山市							1																			溝	古墳前期
19	森浜	新旭町																									(排水溝)	古墳前期	
20	入江内湖	米原町							7						11		2				3	3	3		1		包含層	古墳前期後半	
21	針江中	新旭町																								1		土	古墳中期後半
22	国友	長浜市												1		2							1				自然流路	古墳中期後半	
23	湖西線関連	大津市					1		1					2	2		1							2	1		溝	他 古墳	
24	服部	守山市															9						2		4		周溝状遺構	古墳中期後半～後期	
25	正源寺	五箇荘町																							1				古墳後半
26	川崎	長浜市	1	1			5																				旧河道		
27	勝野	長浜市																							1			溝	
28	鴨田	長浜市																							1	1		沼	

現在、県内で最も古い木製農耕具としては新旭町針江浜遺跡出土の資料（1989年度調査、未整理）があげられる。狭クワ・広クワに属するもので旧湖岸線の微高地に立地する弥生時代前期新段階の溝状遺構土壌などから出土しているが、いずれも未製品である。

(1)クワ類（第1図）

狭クワは、針江浜遺跡の前期後半からみられる。妙楽寺遺跡では、後期後半の資料として狭クワの報告がなされているが内側に「ありじゃくり」的な段が設けてある。

広クワは、やはり前期後半には確認され、中期末はA・C・D類と形状も多様化しているが、後期になると補強強化を目的とした内側に通称「ありじゃくり」と呼ばれる溝の穿たれたF類が主流となっている。服部遺跡出土のもの（旧河道、後期後半）は、「ありじゃくり」を有する上に着柄隆起の両側に穴を備えており、溝との両方で補強材を固定していたものと考えられている。溝のみのF類の固定方法は確かな出土例がないが、赤野井湾遺跡（1988年度調査、後期）では「ありじゃくり」の溝に合致した材のみが残っている例があり、おそらく補強材は板材に溝の形状（内広台形）にあわせた突起を削りだし、柄穴の部分を削り込んだものを使用したものと考えられる。

また、北陸地方特有のものではないかといわれている「ありじゃくり」のかわりに「ゲタ」と呼ばれる突起が内側に削りだされ、さらに着柄突起の両側に穴が穿たれた広クワが1985年度の赤野井湾遺跡の調査（後期）で出土しているが、通称「ゲタ」と呼ばれる内側の段は中期末の大中の湖南遺跡ですでに広クワD類に見られ、着柄隆起の両側の穴も同遺跡の広クワD類に認められることから（九州では広クワD類そのものが見られないが）、この類の広クワは北陸地方という限

られた地域色の強いものではなく、弥生時代後期に少なくとも近江から畿内をも含めた広がりをもつ農耕具ではなかったかと考えたい。時間的には「ありじゃくり」のみのものより先行するようである。

なお、穴を用いた補強材のとじ方では、木釘のほかに、針江川北遺跡（古墳初頭）では桜の皮を用いている。また、このクワは穴の側面に突起が作り出されているが、類例は富山県の江上A遺跡に見られる。

古墳時代になるとますます広クワではF類の占める割合が高くなっている。

着柄隆起をもたず柄穴が方形を呈する広クワE類が弥生時代後期後半から古墳時代初頭に見られるが、九州地方ではこの時期の主流となるようである。特に、松原内湖遺跡出土例は、方形の柄穴に段を有する柄がL字状の別材でくさび留めするかのように装着される独特な方法をとっている。

又クワは、A類が中期から後期に見られるのみでそれ以降消失しているが、C類は組合せスキC類としたものに含まれているものもある。

横クワでは、中期に「丸クワ」とも呼ばれる円形プランのもの（A類）が後期後半には非常に薄手で楕円形ないしは長方形プランのいわゆる「えぶり」と称される形態のもの（B・C・D類）へと変化している。なお、このクワについては薄手のため一度破損したものを補修孔を穿って桜の皮などで結束し再度使用しているものが多く見られる。また、入江内湖・赤野井湾遺跡出土例の中には、広クワF類の補強方法に類似するかのように柄穴の上部に断面三角形の段を削りだし、補強材の装着を示す資料もある。

## (2)スキ類（第2図）

一木スキは、弥生時代中期から古墳時代後期まで身部が長方形のものやや幅広でスコップ状を呈するものがあるが、古墳時代中期以降の鉄製刃先の装着以外大きな形態の変化はない。

組合せスキでは、身部の中央に穴を穿って柄を挿入ないしは結束するA類は弥生時代中期から古墳時代中期まで存続する。

組合せスキB類は、広クワに類似した身部の形態に柄が鈍角に装着するものであり（柄の残存により判明する）、古墳時代前期後半頃には着柄隆起がない以外は広クワF類の「ありじゃくり」を有するものに類似するものや北陸地方特有といわれている柄穴の両側に穴を有するものへと変化していくと思われる（入江内湖遺跡）。

通称「ナスビ形着柄鋤」と呼ばれていた組合せスキC・D類（又クワC類も含む）は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭ごろに出現するようであり身部が二又であるC類は古墳時代中期後半には見られなくなり、服部遺跡資料に見られるように一木スキA類と共に確実にD類にU字形鉄製刃先が装着されている。

## 3. まとめ

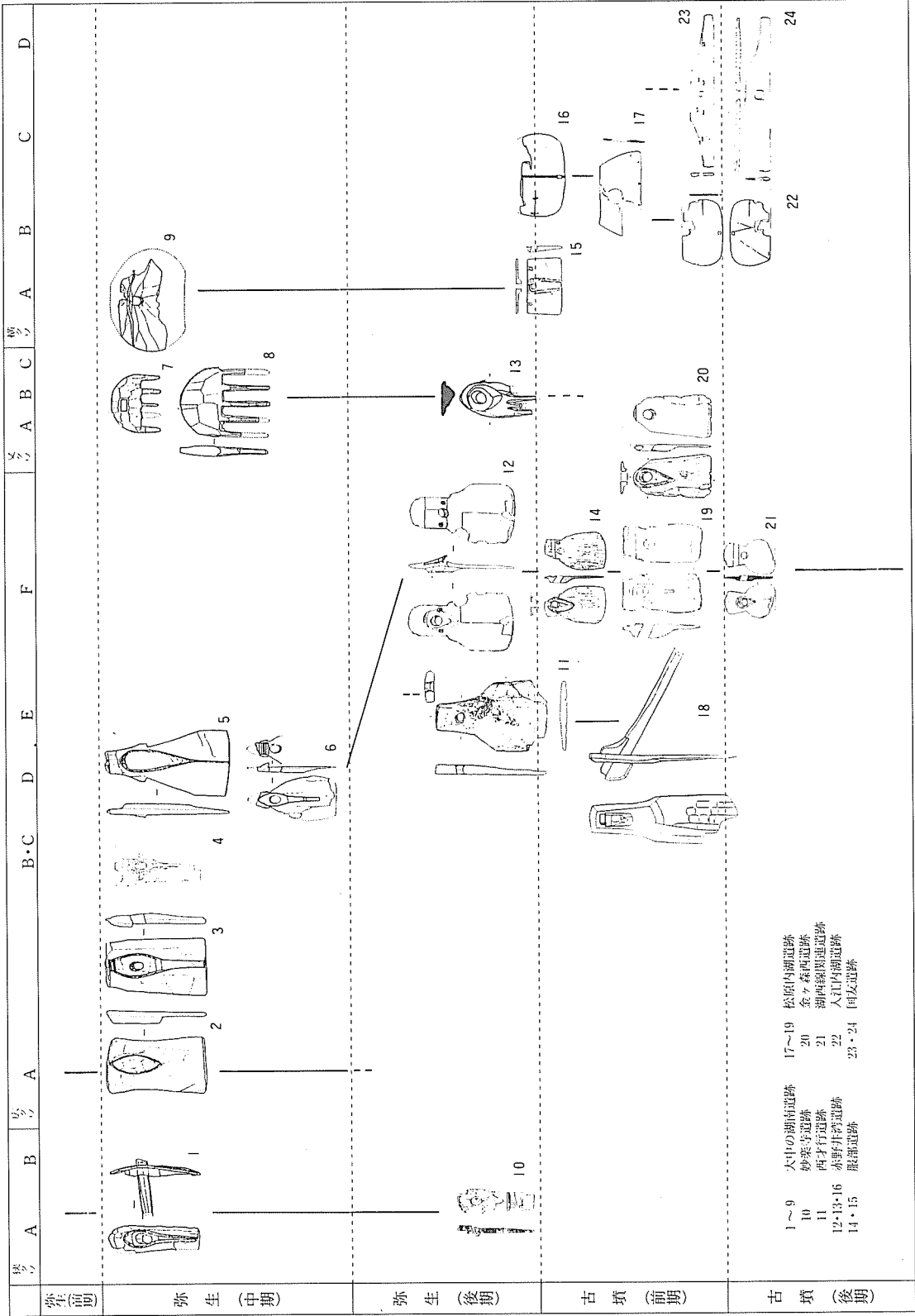
以上のことから県内の木製農耕具の変遷をまとめてみるとクワは、中期には一般の耕作に使用された広クワは形態が様々であるが、それは木製刃先の磨耗を軽減するために使いわけられたも

のと考えられ後期になると広クワF類を中心とした形態に限定されていく。スキは、古くからクワほどバラエティがなく一木スキA、組合せスキA類が長く使用されていて形態にも大きな変化は見られない。ただ、組合せスキC・D類が後期末頃出現している。これらの後期後半頃の変化は、一般にいらわれている鉄製刃先の導入により耐久性が増し多機能となったことに起因していると考えられているが、近江においてもやや時期が遅れるものの例外ではないと考えられる。ただ、後期から古墳時代初めにおける鉄製刃先の装着例は明確ではなく、後期になると服部遺跡や針江浜遺跡の資料で確認できる。

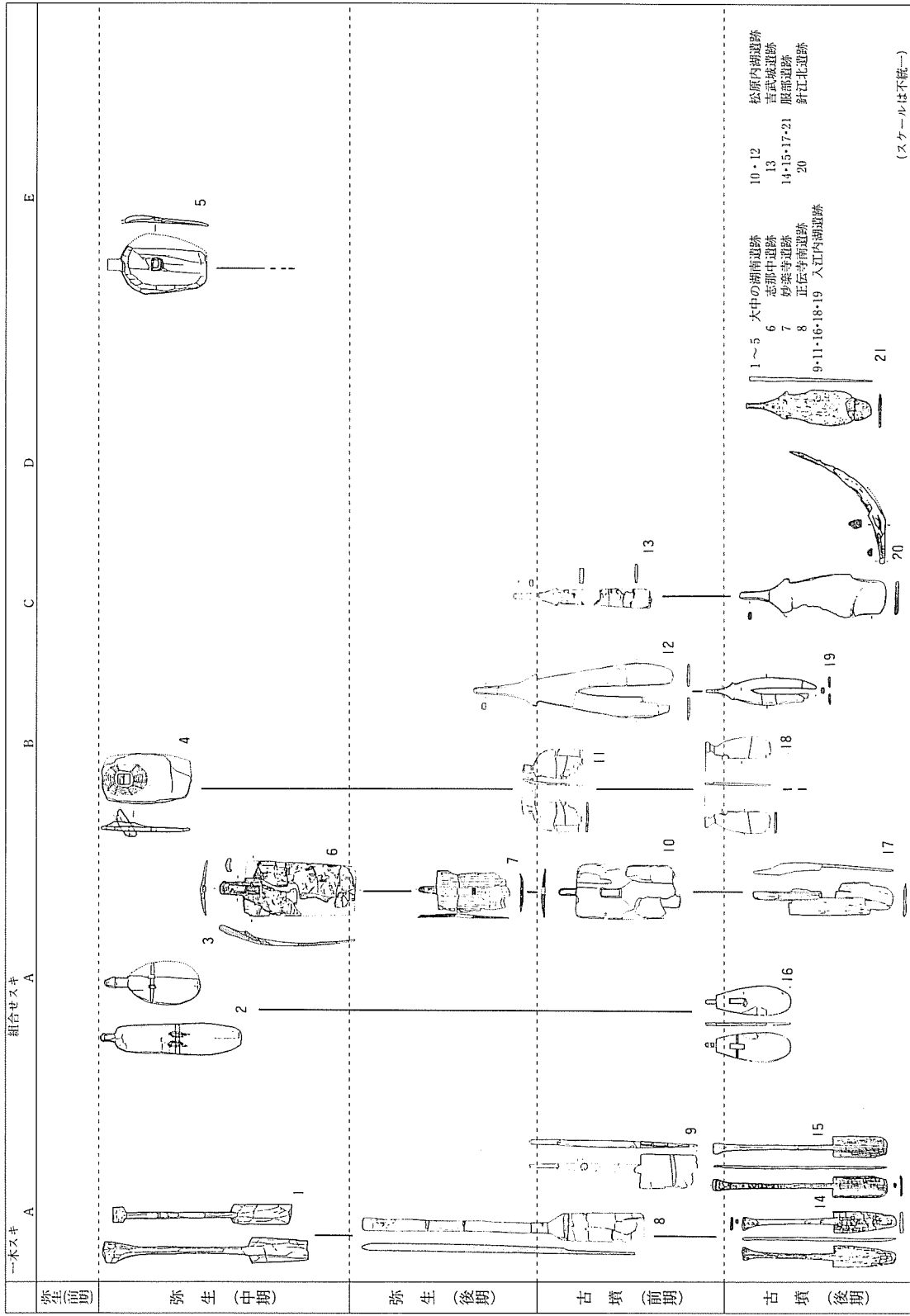
本稿は、現在彦根市の松原内湖遺跡から出土した多量の木製品を整理するにあたり目についた農耕具について、他の県内の資料を集める中で時間的に並べ特徴的なことを記載したにすぎないが、今後報告書を作成するにあたり再度深く検証してみたいと考えている。

#### 参考文献

- ・黒崎直「農具」(『弥生文化の研究5』1985年)
- ・黒崎直「木製農耕具の性格と弥生社会の動向」(『考古学研究』63 1970年)
- ・「木製農具について」(『埋蔵文化財研究会第14回研究集会資料』1983年)
- ・都出比呂志「農具鉄器化の諸段階」(『日本農耕社会の成立過程』1989年)
- ・『大中の湖南遺跡』(滋賀民俗学会 1968年)
- ・浜 修『赤野井湾遺跡』(湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書2 県教委他 1987年)
- ・中井均『入江内湖遺跡(行司町地区)発掘調査報告書』(米原町埋蔵文化財調査報告IX 1988年)  
(表1の○印は、未整理のため点数の不明確なものを示す。)



第1図 県内出土のワクの変遷



- 10・12 松原内湖遺跡
- 13 吉武塚遺跡
- 14・15・17・21 服部遺跡
- 20 針江北遺跡
- 1～5 大中の湖南遺跡
- 6 志那中遺跡
- 7 妙薬堂遺跡
- 8 正伝寺南遺跡
- 9・11・16・18・19 入江内湖遺跡

(スケールは不統一)

第2図 県内出土のスキの変遷

## 編集後記

本年度は協会設立20周年。これに伴う展示会や記念誌の発行等色々な事業を実施した。本号も20周年を祝う意味で、職員全員の投稿を呼びかけたところ、ほぼ全員の27名の参加を得、発刊することができた。紀要の充実はみんなの頑張りによるところが大で、次号以降も編集者を悩ませるほどの投稿を期待したい。

平成2年12月

### 紀 要 第 4 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(0775)48-9780・9781

印 刷 宮川印刷株式会社  
大津市富士見台3番18号  
Tel(0775)33-1241